

点検◎不動産利活用

持続可能な社会への取り組み

第16回

一般財団法人日本不動産研究所

福島県双葉郡浪江町。浜通り北部にある海に囲まれた自然豊かな町は、11（平成23）年6月に営業を再開した「福島いこいの村なみえ」である。

年に発生した東日本大震災と原発事故により深刻な被害が

身近な憩いの場

受け、金町避難を余儀なくされた。段階的に帰還困難区域は解除されてきたものの現状は依然として厳しく、20(令和2)年6月末現在、町民1は浪江駅から約2キロ、車で泊施設である。木々に囲まれた昔ながらの施設で、かつて「福島いこいの村なみえ」分に位置する町所有の公共宿泊施設である。

万6911人に対し、実際の浪江町居住人数はわずか1428人。町民のほとんどがいまだに全国で避難生活を続いている。そんな避難住民の一時帰郷の拠点として活用され

町民と歩む木造仮設住宅

雨漏りもひどい。小さな町の施設なので予算は少なく、すべての客室を改修するにはとても足りない。一方で我が家に帰る準備のため多くの町民が宿泊施設再開を心待ちにしていたが、予算で改修できる客室ではとても足りそうにない。窮地の中、捻出されたのは、ログハウステイプの仮設住宅の移設再利用案であった。

一般的に仮設住宅とい



えはアーバンの簡易なもので、想像するが、実は福島県内で建築された仮設住宅のうち3分の1に当たる約6000戸。反対住宅を無賞褒美で江町から同県二本松市に避難した町民が暮らしていた。

して20棟のログハウスが一晩島いこいの村なみえに移築され、一時帰宅した町民、復興関連事業従事者、研修や相 察で町を訪れる人たちの重要な宿泊拠点として活用されることとなつた。

はイノシシやネズミなど
の野生動物に荒らされ、

上宿泊拠点外観。移築に際し天井を上げたため開放感がある
④室内はバス、トイレ、台所を完備している



「福島いこいの村なみえ」の本館外観。営業再開に伴い8室のみ改修した

は身近な悪いの場として町民に親しまれていた。原発事故での段階的解除に伴い、町民の帰還準備のための宿泊施設整備が急務となり、再開が決定された。

「福島いこいの村なみえ」の営業再開に際し、問題となつたのが客室の修繕である。何年も人の手が入らなかつた客室

えばプレハブの簡易なものを想像するが、実は福島県内で建築された仮設住宅のうち3分の1に当たる約6000戸は木造仮設住宅である。プレハブに比べコストや工期は掛かるが、耐用年数や快適性に優れ、地元に根付いた業者に依頼することで供給の迅速化、地元経済の活性化が図られるなど多くのメリットが見込まれたためだ。これらの木造仮設住宅は、木のぬくもりがする住まいとして多くの被災者に愛された。「福島いっこいの村なみえ」に移築された

ロクハウスもその一部で、浪江町から同県二本松市に避難した町民が暮らしていた。

浪江町のキャッチフレーズは「つなぐ、つながる、ななえ」。かつて仮設住宅として被災者を支えた20棟のログハウスは、困難を抱えながらも、「つなぎ、つながり」とする町民たちを支える宿泊施設へと生まれ変わった。震災の経験を後世に伝えながら、住み続けられる街づくりの一翼を担おうとする「福島」いこいの村なみえ」を、これからも応援していくたい。(福島支所、不動産鑑定士・淺川和徳)